

思わぬ出来事やどんでん返しが続き、次はどうなるのか気になって読み進めてしまう本。

これは、ある日幸運にも、アメリカ留学の機会を与えられたヒラノ青年の、博士号取得を巡る格闘と、博士号がなかったために、不運きわまる一生を送った父親の物語である。

1968年9月(28歳)博士号(ph.D)を取りにサンフランシスコへ。スタンフォード大のあるパロアルトへ。

ところが一月に入って間もなく、米国海兵隊事務所からヒラノ青年に「赤紙」が送られてきたのである。そこには、「このたび貴殿は、名誉ある海兵隊員候補に選ばれましたので、一週間以内に海兵隊事務所に出頭して下さい」と書いてあった。

「留学生に召集令状?? 何かの間違いだろう」と思ったが、心配なのでサンフランシスコの日本総領事館に相談に出かけた。すると、令状を見た領事館員はこともなげに、「あなたにも来ましたか。それでどうなさいますか」と聞くではないか。

説明を聞くと、アメリカで住民登録した一定年齢幅の男性は、たとえアメリカ市民でなくても、ランダム抽出で徴兵の対象になるという。徴兵された学生の代わりに入学を許可された日本人留学生が、徴兵されることになったのだ。この時期に海兵隊に入隊すれば、間違いなくベトナム送りである。

「二年間の兵役を済ませれば、グリーン・カード（アメリカ永住資格）を手に入れることが出来ます。また兵役を拒否すれば、本国送還になるかもしれませんが、それでもよろしいですか」と聞かれたヒラノ青年は、その場にへたりこんでしまった。

「博士号を取るためにアメリカに来たのに、徴兵を拒否すれば帰国するしかない。もうおしまいだ——」。家に戻ったあと、電話でカレンに一部始終を報告したが、相手は慰める言葉もないようだった。帰国するしかないと考えた青年は、眠れない一夜を過ごした。

ところが翌朝、インターナショナル・センターのキャロルに問い合わせたところ、「グリーン・カードを申請する権利を放棄します」という書類にサインすれば、留学生は徴兵が免除されることが分かった。そこでヒラノ青年は、その日のうちに市役所に出かけて、グリーン・カード申請放棄の書類にサインした。

しかし、領事館員ともあろうものが、このような基本的なことを知らないはずがない。この時ヒラノ青年は、「外務省が米国に対する協力の姿勢を見せるために、日本人留学生をベトナムに行かせて、点数稼ぎをしようとしたに違いない」と判断した。

日本人を守ってくれるはずの領事館員が、実はアメリカのエージェントだとするならば、いざというとき誰を頼ればいいのか。「留学生は棄民なのか?」。あとになって知ったことだが、グリーン・カードと引き換えにベトナム行きを受諾して、命を落とした外国人留学生が大勢いたという。

1968年11月22日家族を迎えにサンフランシスコ空港へ

あと五分、あと二分、そして定刻。これを何回か繰返しているうちに、時計は一〇時を回った。不安を抑えるために、もう一回、またもう一回と経路を想像してみた。しかし、一〇時を一五分過ぎても到着表示は出なかった。

たまりかねたヒラノ青年は、JALの業務を代行しているパンナムのカウンターで、「JAL〇〇一便は何時に着くのか」と訊ねた。すると白人女子職員はこともなげに、「It has dropped. NO further information（その飛行機は墜落しました。それ以上のことは何も分かりません）」と答えた。

ロボットのように無表情な女性は、茫然としているヒラノ青年の腕を取り、到着ゲートの手前にあるVIPルームに案内した。部屋には二〇人ほどの出迎え客が集まっていた。若い娘は声を上げて泣きじゃくり、老婦人は気を失ってソファの上に身を横たえていた。「ここは黄泉の国の入り口か？」

アラスカからの寒風が流れ下るサンフランシスコ沿岸は、夏でも水温は一〇度くらいしかない。しかも沢山のサメが棲息している海域である。サンフランシスコの霧は、太平洋の湿気がこの寒流で冷やされることによって発生するのである。

アメリカ大陸に到着する前に墜落したのだとすれば、機体は海底に沈んでしまっただろう。そうでなくても、二人の幼児を連れた妻が助かる見込みは万に一つもなかった。

・・・

VIPルームには次第に人が増え、座る席がなくなってきたところに、一旦部屋を出て行ったカレンが戻ってきて、飛行機はサンフランシスコ湾に墜落したが、生存者がいる模様だという情報をキャッチしてきた。郵便局に勤める友人に電話して聞いたと言うのである。飛行機は国際郵便を積んでいるので、事故の報せはいち早く郵便局に届くのだそうだ。

ヒラノ青年はカレンの機転に感心する一方で、それならなぜJALが直接伝えてくれないのか、と怪訝な気持ちになった。「どうせそんな話はデマだろう。それに一人や二人の生存者が居たところで、それが幼児を連れた道子であるはずがない！」。こうしてまた時は流れていった。

一一時半をまわったころ、場内アナウンスで、「JAL〇〇一便はサンフランシスコ湾に不時着しました。乗客は全員無事の模様、というニュースが伝えられた。救命ボートで海岸に到着した乗客を乗せたバスが、間もなく飛行場にやってくるというのである。

ヒラノ青年は本や映画を通じて、世の中ではどのようなことでも起こると知っていた。しかし、「墜落→家族全員死亡→全員無事」のドンデン返しに、深い谷底を覗いたような恐怖を味わった。

妻と二人の子供は、一二時過ぎに何事もなかったかのような笑顔で、税関のゲートから出てきた。輝いている道子。手を引かれている赤い野球帽の健太郎。そして道子に抱かれて泣いている麗子。

単位を取るだけであれば、七割程度解けばいい。しかしAを取るには、八割以上解かなくてはならない。そして人気がある教授に論文指導を引き受けてもらうためには、宿題で平均九〇点以上取ったうえで、試験でもAを取り、資格試験を上位でパスすることが必要なのである。

・・・

一人の教授が受け入れる学生の数には限度がある。誰を受け入れるかは、教授の裁量に任さ

れる。そして**教授の判断基準は、一にも二にも成績である。**

一九七〇年の三月末、ヒラノ青年はその後の一生を決める資格試験に臨んだ。初日は得意な四科目である。一〇〇人は収容できる大きな階段教室に、パラパラと散らばる一六人の学生。一時ちょうどに始まる筆記試験は、五時間の長丁場である。

・・・

翌日の昼、学科主任の部屋の前に一〇人の合格者が貼り出された。昨年の惨憺たる結果について、学科主任が学部長に説明を求められたという噂だったが、それに懲りて今年は合格ラインを下げたらしい。

“出来る、と見ていた人たちの中で不合格だったのは、ミシェル・ルガル一人だけだった。

その日の午後、ミシェルからこれからすぐ会えないかという電話が掛ってきた。夕方遅く姿を現したミシェルは、頬がこけ眠が落ち窪んでいた。

一日目の試験の最中に体調が悪くなり、その晩から高熱が出たという。**インフルエンザ**に罹ったのだ。二日目は頭が朦朧として、ほとんど問題に手が付かなかったということだ。ミシェルの教科成績はほとんどAだったから、学科主任は翌年の再受験を勧めた。

しかしフランスには、兵役というものがある。・留学に際してこれを免除してもらっていたが、**資格試験に失敗したときには、兵役につく約束になっていたのだ。**生まれて初めて経験した挫折が、このエリートの一生涯を狂わせてしまったのである。

妻が勧めた残り物のカレーライスを食べる青年の目からは、涙があふれ出していた。ヒラノ青年が差し出したティッシュで涙をぬぐったミシェルは、フランスの連絡先を書いた紙片を差し出した。その手を握りしめながら、ヒラノ青年はこれから先二度とこの青年と会う機会はないだろうと思っていた。

アメリカの大学で一年以上“生活、する日本人は、三つのグループに分類することができる。第一種は修士コースの学生、第二種は博士コースの学生、第三種が種々雑多な研究員である。この中で最も数が多いのが、修士課程で二年を過ごす、二〇人ほどのビジネスマンである。必要経費はすべて会社が負担してくれるので、これらの人は経済的に恵まれた生活を送っていた。彼らは、日本の代表的企業の選り抜きの人材で、自分の能力に自信を持っている上に、帰国後の心配はないから、精神的にゆとりをもって過ごしていた。また四五単位分の講義を履修すれば、(論文を書かなくても)修士号が手に入るから、一年少々で単位を取り終えた後は、アメリカン・ライフをエンジョイすることが出来る。

これらの人に、「アメリカ生活はどうだった？」と尋ねれば、ほぼ全員が、「一生で最も充実した時間を過ごした」と答えるだろう。そしてヒラノ青年も、博士号取得を諦めさえすれば、彼ら同様にハッピーな生活を送ることができたのである。

一方、六人の博士課程学生のほとんどは、どの組織にも所属することなく、大学からの奨学金を頼りに、長期戦を覚悟やってきた一匹狼である(一年後にやってきた、鳩山由紀夫・元総理のような大富豪の倅もいたが)。

平均成績がBを下回れば奨学金を打ち切られるし、**資格試験に失敗すれば退学勧告が出るから、これらの人は点取り虫に徹していた。**たとえば、通産省を退職して博士号を取りにきた経済学科の田村氏は、時間に余裕がある修士課程の日本人との付き合いを避けるため、資格試験

が終わるまでは中国人を装っていたほどである。

資格試験にパスしても、博士号が手に入る保証はない。彼らは二～三年かけて論文を書くのであるが、四年以上かかる人も少なくない。ヒラノ青年が知る限りでは、日本人の最短記録は二年、最長記録は一五年（！）である。七年頑張ったが、博士号を取れずに日本に帰った人もいた。

博士課程の学生は、あちこちの大学からやってきた一匹狼である。資格試験に通るまで研究室は与えられないから、全員が孤立した状態で勉強に取り組んでいる。そして試験にパスした直後に、友人は全て“ドロボー”予備軍だという訓辞を受ければ、“美しい友情”など生まれるはずがない。同じ学科の仲間の中で“友人”と呼べる同期生は、ミシェル・ルガルだけだった。

論文書きが終わっても、依然として熾烈な競争が続く。有力大学に採用された助教授は、三年の任期中に五、六編の論文を書けば、契約が三年間延長される。そしてその間にもう六編の論文を書けば准教授に昇格し、**テニユア**（終身在職資格）が手に入る。そこからあとは、普通にやっていたら解雇されることはない。しかし研究が滞れば、給料は据え置きである。

この条件をクリアできなかった助教授は、格下の大学に移籍するか、民間に転出せざるを得ない。そしてひとたびこの坂を下り始めると、復帰の道は絶たれる。アメリカはやり直しがきく社会だと言われているが、研究者の場合はほぼ絶望である。

なぜならランクが低い大学では、週に六コマ以上の講義を担当させられるため、研究に割く時間が減ってしまうし、民間企業に出れば、研究論文を書いている時間がないからである。

「ご心配をおかけして申し訳ありません。あれこれ考えた結果、面白い問題が見つかりました。双線形計画問題にトイの切除平面法を当てはめると、うまく解けると思います」

「双線形計画問題。トイの切除平面法。それは面白い」

ヒラノ青年は、このあと毎週一回教授のオフィスを訪れ、研究の進展状況を説明した。教授の激励のもとで研究はどんどん進み、三月中には“ごく細かい”数学上の問題を残して、論文の骨格が出来上がった。

・・・

同期生の誰よりも早く、そして一年先輩のマグナンティより早く、“ビューティフル”な論文を書き上げ、「超」競争社会を勝ち抜いた青年は**得意の絶頂**にあった。

審査委員会での発表を終えたあとの質問は、想定範囲内に納まっていた。一旦退席させられた後、再び五人の審査員の前に呼び出されたヒラノ青年は、**全員一致で合格**の決定が下されたことを知った。

“世界最高の OR 学科で、世界最高の教授のもとで、同期生の誰よりも早く博士号を取った”、ヒラノ青年は、デビッド・ルーエンバーガー教授とジーン・ゴラブ教授の手を握りながら、心の中で「来た、見た、勝った」と叫んでいた。

舞い上がった青年は、一冊三〇ドルという大金をものともせず、スタンフォード・カラーの赤表紙を付けた論文を四冊製本した。二冊はダンツィク教授と大学時代の指導教官である森口教授に献呈するため、一冊は（ついに博士号を取ることが出来なかった）父のため、そして最後の一冊は自分のためである。

・・・

博士論文が完成すると同時に、名門パークレーの助教授に迎えられた兄弟子が、帰国前に一度話を聞きたいというのである。そこでヒラノ青年は、アメリカを発つ数日前に、パークレーを訪れた。

アドラーの炯眼は、証明の不備を見破っていた。勝ち誇ったように間違いを指摘するアドラー。そして言い過ぎたと思ったのか、最後に付け加えた、「間違っているが、ここには何かある」という声もうつろに、ヒラノ青年はアドラーの部屋を辞した。

かくして、「来た、見た、勝った」は、僅か二ヶ月で砕け散ってしまった。

ここに新たな問題が加わった。原因は「飲んだくれ」の出現だった。その名はジョン・ダンスキン博士。十数年前に発表した著書で有名になったものの、いまは定職をもたずに、各地の大学を渡り歩くこの風来坊は、一〇月から三ヶ月の契約でこの研究所に滞在していた。

世界最高峰といわれるプリンストン大学数学科の出身だから、若い頃は秀才だったのだろう。年の頃は五〇歳くらいで、ヒラノ青年よりやや背は低いが、腹周りは一メートルもあろうかという肥満体である。ツンツル天のチョッキのボタンは宇宙の彼方に飛び去り、その隙間から肉の一部がはみ出していた。

そして昼間だというのに、内ポケットからウィスキーの小ビンを取り出して、チビチビやっているのである。朝から酒臭いこの男は、夕方には完全に出来上がっていた。

・・・

ジョンは、まだヒラノ青年が「リッター以来のドジ」だということを知らないようだった。アル中男とまともに付き合う人はいなかったからだろう。しかし、そのうちにこの男にも分かる日が来る。全所員が知っている事実が、最後までばれずに済む可能性は小さい。その時までダンツィク教授の秘蔵っ子を演じ続ければ、反動も大きいだろう。こう考えたヒラノ青年は、**ジョンに一部始終を告白した。**

しかしこの男の反応は、予想と違った。

「そのことは知っている。君の論文はあちこちで評判になっていたのだから、去年ここに居たときに読んだ。そしてあの定理の証明が少々怪しいということも知っていた。君がフー教授からやられて参っていることも、リンから聞いている。

しかし俺は、君の論文を読んで、なかなかのものだと思ったよ。あの論文のいいところは、現実問題に立脚している点だ。第二部に書いてあった応用問題は、様々なところで利用できるものだ。ああいう面白い問題を発掘して、世間にその重要性を知らしめただけでも十分な価値がある。

・・・

ダンスキンの励ましは、マイナスの効果をもたらした。「この男は、俺が自分と同じ道をたどることを見越しているのではないか。どこかで力尽きてやる気を無くし、酒に溺れる毎日（もうそうなっている！）。そして家族に見捨てられ、何一つまともな研究成果を出すことなく朽ち果てる人生」。

ジョンは二〇年後のヒラノ青年そのものだった。そしてそこに重なったのが、父・茂夫の姿だった。

父は間もなく六三歳になろうとしていた。大学の同期生のほとんどが、有力大学の教授に納

まっているのに、博士号がないため、いまだに駅弁大学で助教授勤めである。大学では何十年も基礎数学を担当し、家に帰れば中学生や高校生を相手に中等数学を敢えて、生活費の足しにする。そしてその合間には、映画を見たり、数学とは関係がない教養書を読みふけていた。本業を投げ捨てた父は、子僕の眼から見ても明らかな敗残者だった。

一九九四年、五三歳になったとき、ヒラノ教授は二一年間の一般教育担当教員生活から脱け出し、専門教育担当教員になった。思えば長い道のりだった。そしてこのとき始めて、「本物の」博士になったことと「本物の」教授になったことを、父の墓前に報告する気になったのである。

四八歳から六〇歳までの一二年間、仕事の上では全てが順調だった。その一方で、五〇代に入って発症した妻の難病が、「幸せ」と「安らぎ」を奪っていった。

案の定、父は研究テーマをめぐって、指導教官のA教授と衝突した。不勉強な学生が、そのような難問に取り組むのはやめた方がいい、というアドバイスを受け入れなかったからである。この結果、父は教授のイジメ（今で言うアカハラ）の対象になった。イジメはかなり徹底したものだ。そして小野氏は、それを至近距離から見ていた。

仲間たちより一年遅れて卒業した父は、府立一中時代も、また静岡高校に移ったあとも、この問題に取り組んでいた。そして戦争が終わる直前に、大きな定理を証明した。

父はこの結果を論文にまとめて、A教授に送った。しかし教授は、これに答えてくれなかった。自分に刃向かった学生の論文など、読む気になれなかったのか。それとも、単に忙しくて読む時間がなかったのか。

戦況は悪化し、昭和二〇年三月には東京大空襲があったのだから、論文を読んでいる余裕がなかったのかもしれない。また戦争中のことゆえ、父は学会で研究発表を行う機会もなかった。

ところがこのとき、同じ問題に取り組んでいたもう一人の人物が居た。二年後、父の定理はY氏の手で再証明された。この業績で博士号を取ったY氏は、のちに世界的に名を知られるスター教授になった。

小野教授は、学士院賞受賞の際の祝賀パーティーで、「Yの定理を最初に証明したのはヒラノだ。彼には気の毒なことをした」と、A教授が述懐するのを耳にしたという。

静岡大学学長に選任されたとき、小野教授はかつての友人が、駅弁大学で助教授のまま定年を迎えようとしていることを知って、衝撃を受けた。そして教授に昇進させるべく、周囲に根回しした。

しかしA教授は既に他界し、三〇年前の父の業績を裏付ける証拠は残っていなかった。数学科の教授たちは、学位も業績もない上に、雑用もやらない父の昇進を認めようとしなかった。このとき父は学長に言ったという。

「無理をしてまで、教授にしていたかなくても結構です。学生たちに好きな数学を教えることが出来れば、私はそれで満足です。それに、家族が東京に住んでいますので、週に三〜四日しか大学に出てきませんが、そのようなことが許されるのも助教授だからです。ですから、みなさんの反対を押し切ってまで、教授にしようとするのはおやめ下さい」と。

この後間もなく父は、血糖降下剤の副作用で異常を来した。そして、それと共に教授の目は完全に消えた。解任されずに済んだのは、小野学長が庇い続けたからだった――。

学生時代以来、「あんな風にだけはなりたくない」、と思っていた父の真実を知った時の驚きを、何と表現すればいいのだろうか。